



No. 19

平成20年度留学生歓送迎会報告

旭川校国際交流委員会 副委員長 初岡宏成

平成20年度は、以下の5回の歓送迎会が実施された。

- (1) イリノイ州立大学からの留学生の歓迎会（5月20日（火）
18:00-20:00、生協食堂）

本校とイリノイ州立大学との間の協定に基づいて例年実施されている、日本教育研究セミナーに参加する留学生2名を歓迎する会が開催された。対象者は、Gjerde KristenさんとDundek Katerinaさんで、彼女たちのホストファミリーの方々や他の留学生も加わり、大変に賑やかな歓迎会となった。

- (2)イリノイ州立大学からの留学生の送別会（6月10日（火）18:00-20:00、
生協食堂）

約1ヶ月の研修を終えた二人との送別会で、訪問先の学校の先生方、国際交流関係の先生方、ホストファミリー、交流の深かった学生たちも参加し、総勢30名の会となった。本人たちからは、日本語でのあいさつの他、初めて書いたという習字なども披露され、極めて和やかな雰囲気での送別会であった。

- (3)アラスカ大学からの留学生 Anthony さんとの送別会（8月8日（金）17:00-19:00、交流室）

平成20年4月から旭川校に配属となっていた、Olexa Robert Anthony さんが8月下旬に旭川を離れるため、送別会を開催した。彼が所属していた、古川善夫先生のゼミの学生が多数参加し、大変にアット・ホームな会となったが、トニー君と呼ばれていた彼が、旭川校はとても居心地が良く仲間も楽しくてここを離れたくない、と話していたのが印象的であった。



- (4)留学生歓迎会（10月22日（水）17:00-19:00、生協食堂）

平成20年度10月から旭川校に配属または来校する6人の留学生を歓迎する会が開かれた。対象者は、アルムストロング・チェラ・アデルさん（特別聴講学生、女性、オーストラリア）、ボンティエ・ミラ・リーさん（特別聴講学生、女性、オーストラリア）、アルサランさん（大学院研究生、男性、中国）、バダムドルジ・マルトさん（大学院研究生、男性、モンゴル）、チョウ・エイさん（大学院研究生、女性、中国）、キン・キンさん（大学院研究生、男性、中国）であった。他の留学生や教員、関係する学生なども多数参加した。

(5)留学生送別会(2月27日(金)17:00-19:00、生協食堂)

3月で旭川校での学業を修了する7名の留学生を送り出す会が開催された。対象者は、アデルさん、リーさん、シュウ・キンエイさん(女性、中国)、ウリーゲムレンさん(男性、中国)、イ・キョンモさん(男性、中国)、ゴ・ムヒさん(女性、中国)、シュー・ウさん(女性、中国)であった。教員だけではなく、交流の深かった学生も多数参加し、40名近くが集まり留学生との別れを惜しんだ。

以上のように、留学生の歓送迎会は平成20年度も例年と同様に数多くの参加者を集めることができ、いずれも盛大な会を開催できた。これは、国際交流に理解のある学生や教員の方々、訪問先の方々のご協力なしではできなかったことであり、ここに深く御礼申し上げます。今後も、こうした活動を通じて、本校の国際交流がさらに活発化することを望む次第です。

イリノイ州立大学短期研修報告

貴重な経験

理科教育専攻 山口 聖美

幼少期に英会話を習い、当時は両親にも「海外に留学してみたい」と言っていました。しかし、学年を追うごとに英語の勉強が難しくなり、英語が嫌になっていきました。そんな中、このような機会があり、親にも進められ、軽い気持ちでイリノイ州への短期留学を決意しました。アメリカでのプログラムは、午前には英語の授業が毎日あり、そこでは英語だけで会話するというルールのもとで学習していました。英語しか耳に入ってこない環境で生活していると、自然と英語も理解できるようになり、あまり考えなくても会話ができるようになりました。また、本場の英会話は、今まで学んできた英語とは使い方が若干異なり、とても勉強になりました。

午後は色々な学校へ訪れ、子どもたちと触れ合ったり、学校の様子を見たりすることができました。お菓子の時間があったり、横になりながら授業を受けたり、教科書がとても厚かったりと、日本とは違う点が多々あり、驚くことがたくさんありました。

そして、私はアメリカにおいて特に珍しい経験をすることができました。ある日、私は友人とそのホストファミリーと一緒にインド料理を食べに行きました。満腹感でいっぱいになり、そのときからおなかの調子がよくありませんでした。胃薬を何度か服用しましたが、痛みはあまり治らず、2日後、おなかに激痛が走りました。ホストファミリーに説明し、その日はシカゴへ行く予定だったのですが、それを断念し、病院へと向かいました。そこで、CTスキャン、超音波検査などを受けました。その他、英語で症状を質問されましたが、専門用語が多く今までの英会話レベルでは全然通用しませんでした。辞書を使いながらなんとかやりくりしましたが、とても時間がかかりました。ホストファミリーや先生方もわかりやすい言葉で言い直してくれましたが、このときほど英語を話せるようになりたいと思ったことはありませんでした。検査の後、1日入院し、次の日の朝、今後どうするかを決めることとなりました。夜は何度も目が覚め、痛みを耐えながら、孤独な夜を過ごしました。

そして、次の日の朝、先生から「手術をします」という衝撃的な言葉を聞くこととなりました。言葉がわからない中で初めての検査や入院を経験し、それに加えて手術となると不安は一層募りました。しかし、ホストファミリーや先生も熱心に病状について説明してくださり、手術することを受諾しました。



手術は無事終わり、すぐにでも退院してよいと告げられました。手術を終えたばかりなのに?!と驚きました。しかし、アメリカでは手術後も長く入院しないことが普通らしく、私も手術をした4時間後には家に帰りました。そして、次の日には小学校へ行き、子どもたちに手を引かれながら走り回ることとなりました。正直、きつかったのを覚えていません。

病院食もレストランのようなメニューの豊富さで、ピザもホットドッグもデザートも何もかもが好きだけ自由に頼めました。また、手術での傷口は縫われていなく、バンドエイドでとめられていただけでした。これも、アメリカでは普通ようです。何もかもが新鮮で日本では考え

られないことが多く、驚いてばかりでした。入院するだけでなく、人生初の手術がアメリカという異国の地という経験は、めったにできる経験ではありません。今となってはよき思い出です。

しかし、入院、手術をしたことで、多くの方に心配をかけてしまいました。また、言葉が通じない中での出来事だったので多くの方に支えられることで、なんとか乗り切ることができました。助けていただいた方々、心配してお見舞いに来てくださった方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の留学の経験は、自分の考を広げ、今後の進路選択にもつながる大きなきっかけとなりました。もっと英語を話せるよう勉強し、再びホストファミリーに会いにアメリカへ行きたいと思います。

哈爾濱師範大学交換留学報告

中国留学記

国語教育専攻 渡部 宏美

「中国どうだった？」

帰国してから友人に会うたびに私はこう聞かれる。聞かれるたびに私はこう答える。「うん。すごく楽しかったよ！」本当は、辛いことや大変なこともあったけど、やはり中国に行っていた一年を思い返すと楽しかったことばかりがたくさん思い出されるからである。

私は中国に行く前、中国語が話せたわけでもなく、中国の歴史に特別わかったわけでもない。だからどうして留学することにしたのか、疑問に思われることも多いのだが、日本以外の国に短い時間でも住んで、文化の違いや人の考え方の違いなどを自分で感じ取り視野を広げたいと思っていた。だからそんな理由で中国に留学したいと言った私を応援してくれた両親にはとても感謝している。



私の中国語はまったく話せないと言ってもいいほどゼロからのスタートだった。中国ではもっと勉強しておけばよかったと後悔することも多かった。しかし、中国で生活するにつれ、中国人や留学生の言っていることがしだいに理解できるようになり、自分達だけで旅行できるくらいまで中国語を上達させていくことができた。学校の授業で中国語を学ぶ。中国人の先生がゆっくり何度も分かるまで教えてくれる。発音の仕方や単語の意味までしっかり教えてくれる。中国語で説明するのだが、不思議なことになぜか理解できた。先生の教え方が上手かったからなのだが、最初の私は中国語が理解できるようになってきたと勝手に思っていた。

中国では、留学生専用の寮があり、私達留学生はそこで暮らした。留学生用ということでトイレもきちんとドアがあり、(中国人が住む寮はトイレにドアがなかった)お風呂もきちんとついている快適な寮だった。留学生寮にはロシア人、韓国人、アメリカ人などがいて日本ではできない多国籍の国際交流を楽しんだ。お互いの文化を紹介したり記念日を一緒に祝ったりと興味深い体験をすることができた。韓国人は本当にキムチを毎日食べること、ロシアのクリスマスは一月七日、インデペンデンスデーにはスイカを食べることなどを知った。

中国の魅力はやはり物価の安さで、一ヶ月に二万円を持っていたらとてもリッチな生活を送ることができる。一日だいたい130円(約450円)でおなかいっぱい三食食べることができた。食事日本人の舌には合うようでどれもおいしかった。中国の料理は寮がとても多くとも一人で食べることができないのでいつも友達何人かと食べていた。最初のうちは、食事を残すべきではないという日本のもったいない精神が働いてしまい、お腹の限界を過ぎるまで食べてしまい後で後悔することが多かった。食べ物を残しても失礼ではなく、逆に残すほど出すのが中国式なのだと後で知った。客が来て自分の出した料理をすべて食べてくれたほうが日本人はうれしいのだと中国人に言ったら逆に驚かれてしまった。

中国の料理はおいしかったが、日本の料理が恋しくなり日本ではそんなに好きではないものも、よく食べたくなった。日本から友達が持つ

てきた、あるいは日本から送られてきた日本食が中国ではごちそうだった。ある日、ご飯とゆで卵だけを買ってきて、ご飯にのせ日本の醤油をかけたご飯を食べた時、涙がでそうになった。私はやっぱり日本人だ、日本食がないと生きていけないと本気で感じた。



中国で最後まで慣れなかったことは、交通である。中国人は平気で道路を渡る。車が来ているのに渡る。車も慣れているのか止まらない。毎回道路を渡るたびに恐怖と戦っていた。中国では右折する車は赤信号を無視してもいいルールがあるので、決して青信号でも油断してはいけない。そして車は歩行者のために止まってくれない。私は二度ほど友達に命を救ってもらった。その時、普通は止まるでしょ、って思った後、私の思ってる普通は日本での普通なのだと知らされ、自分が常識だと思ってることはなんなのだろうと考えた。

世界がものすごく広く思えた。

最後に、私は留学をして本当によかったと思っている。卒業は一年延びてしまうが、私の一年間の体験はそれよりも価値があるものだと

思っている。留学に興味がある人がいるのであればとりあえず行ってほしい。日本で思ってる留学に対する不安というのは大抵どうにかなるものであるのだから。

留学生研修旅行報告

幼児教育専攻 チリチマ(中国 内モンゴル)

北海道教育大学旭川校では毎年留学生研修旅行という活動があります。大学の国際交流委員会の先生たちに道内の有名な観光地に連れて行ってもらいます。そこで、私たちは、北海道の歴史や現在について様々な勉強ができます。

今回の旅行先は、「洞爺湖」、つい二か月前に洞爺湖サミットが行われたところです。いつか行ってみたいと思っていた所です。でも今回は教育実習と重なってしまい、私は行くことを諦めるどころでした。日程は幸いに土日だったけれども、土曜日に実習先の学校では学校行事が行われ、結局私はみんなと一緒にには行けなくなりました。そのことを先生と相談したところ、みんなを追いかけて行ってもよいとのことで、私は用がすんだあと一人で淋しく洞爺湖へ向かいました。私が着いた時、みんなは一日の観光の感想について交流しながら、晩ご飯を待っているところでした。私は非常に残念ながら、みんなと一緒に洞爺湖を観光することができなかったため、その話題に入れませんでした。

いよいよ、晩ご飯の時間になり、みんなでテーブルを囲んで様々な話題を広げました。私は、先生たちとモンゴル民族について語ったり、教育実習についてのアドバイスなどをたくさんいただいたりしました。晩ご飯のあとはお風呂タイムになり、のんびり、ゆったりした時間を過ごしました。心も体も温まった気がしました。その後はホテルの売店に寄って、アイスやお菓子を買い、部屋に戻ってベランダみたいところに椅子を運び、夜の湖を眺め、友達と人生話をしながら、湖での花火大会を待ちました。その素敵な瞬間がついにやって来て、私たちの興奮状態は長いこと続いていたような気がします。花火大会は何十回も何百回も見ているけれど、「湖の中で花火」というのは、またひと味違って、本当に表現できないくらい素敵でした。

次の日は早起きして、前の日遅れて行けなかった中島や、乗れなかった船、そして見れなかった風景を一人でたっぷり眺めました。中央に大島など4つの中島を浮かべ、周りを山々に囲まれた洞爺湖は、本当に美しかったです。日本は、世界地図で見るととても小さな島国ですが、私には日本という国が小さく感じないので、それは、日本は自分の国の特徴をいかして、国造りや町づくりを要領よくできたからだと思います。日本人は素晴らしいと思います。日本には見習うことがたくさんあります。私は日本で学んだことをいかして、自分の民族の発展に貢献したいと思います。

今回の旅を通して、私は、また一回り成長しました。自分の国では決して経験できないことをたくさん経験でき、本当に幸いに思っています。

留学生研修旅行に行く度、私は日本の歴史、文化や暮らしについて知識が増えます。このようなチャンスを作ってくださいる大学の国際交流に係る先生方やみなさんに、心から感謝しています。また、今年の研修旅行も楽しみにしています。

留学生生活を振り返って

周 宇(沈陽師範大学)

一年間の留学生生活はあっという間に終わった。この一年間の留学生活の中で、いろいろな思い出を作って、いろいろな勉強をして、本当によかったと思う。

一緒に留学に来た人が五人である。私たちは自分から選んだ専門によって、三か所に分かれた。私ともう一人は旭川校に配属された。旭川に着いたとき、道にまだ雪が積もっていた。この真白い雪と町の美しさに感動した。旭川に来る前に、先輩たちは旭川の真冬の雪はすごく積もっていて、とってもきれいだと聞いた。だから、その時から私は旭川の冬の雪をすごく楽しみにしていた。迎えに来てくださった先生に連れられて、本場の日本料理をいただいた。初めて本場の日本料理を食べるので、ちょっと緊張した。日本料理を食べるときのマナーとか、食べ方とかを心配した。でも、先生たちが優しく教えてくれて、安心した。あの夜のご飯はすごくおいしかった。

次の日、先生たちに連れられて、学校のキャンパスに行った。学校は想像していたよりも、少し小さいと思ったが、キャンパスにはたくさん天高くそびえる木が並んでいて、それ見ると思わず「すごーい！」と声をもらしてしまった。

少し慣れてきたと思ったら、新学期が始まった。旭川校での勉強は、日本の学生と一緒にすることが決まっていた。日本の学



生と一緒に勉強することは、日本語がまだうまくできない私にとって、非常に心配だった。先生の講義の内容がわからないかもしれない、学生とコミュニケーションがうまくできないかもしれない。いろいろと心配をした。最初は聞き取れなかった。しかし、先生たちの親切と学生たちの優しさに安心した。隣の学生が自分のノートを借してくれたこともあり、本当に感動した。時間が経つにつれて、先生の講義の内容も次第に聞き取ることができるようになった。授業の後は、だいたい図書館へ行って、当日の講義の内容を復習した。全部日本語で書かれているので、やや難しかったが、辞書を調べながら勉強をして、講義の内容を理解するように勉強した。図書館でみんなが静かで勉強する姿を見ていると、自分のやる気もなんとなく強くなってきたように思われた。

学校にいた間、勉強のほかにも、いろいろな活動に参加した。一番印象が深いのは、六陵祭である。学科やサークルなどによって、いろいろなグループに分かれ、各自代表的な料理を作る。そして、みんな店を出して販売する。材料から、全部みんな自分で準備していた。たいへんだろうが、みんなすごく楽しそうに思われた。私の所属するグループは春巻きを商品として売った。みんなチャイナドレスを着て、だれもが似合っていた。チャイナドレスは懐かしくて楽しかった。みんなで一緒に写真を撮って、いい記念になった。最後に、みんな努力した後の売上げをみると、だれもが笑顔をした。準備をしたときの辛さはあっというまに忘れた。

六月祭の後、先生たちが私たち留学生を連れて、北海道で有名な観光場所、洞爺湖へ旅行に行った。中世の古城をイメージした豪華な遊覧船に乗って、洞爺湖の全景を観光した。先生に詳しく教えてもらいながら、洞爺湖の美しい景色を観光して、とても楽しかった。そのほか、火山博物館や昭和山、科学館を観光し、夜は天然の温泉に入って、本当に楽しい旅をした。

一年間の留学生生活は本当に短かった。先生たちのご指導と学生たちのやさしさは忘れません。本当にありがとうございました。この留学生生活は私にとって人生の財産だと思う。大事に活用して、将来の人生に役に立てられるように頑張ります！